

戦間期の日本探偵小説と幽霊

宮崎 遼河

北海道大学大学院文学院

映像・現代文化論研究室



未来社会のあるべきかたち

◆日本近現代文学と実社会の横断

◆オカルティズムへの欲望の根源を探る

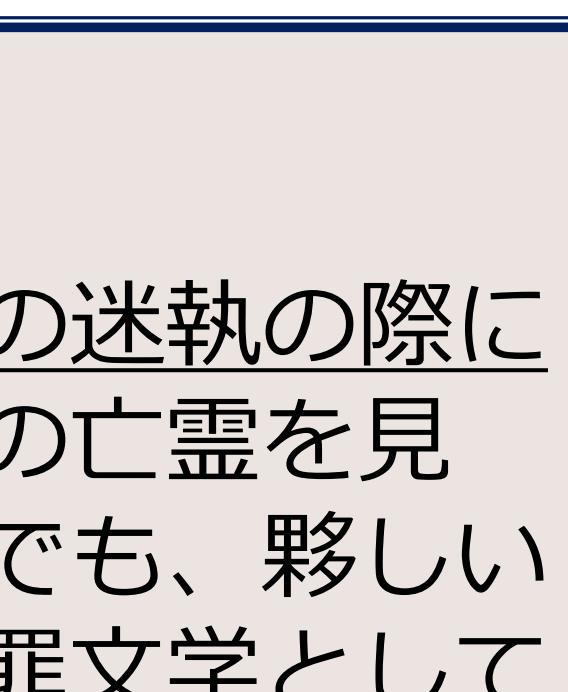
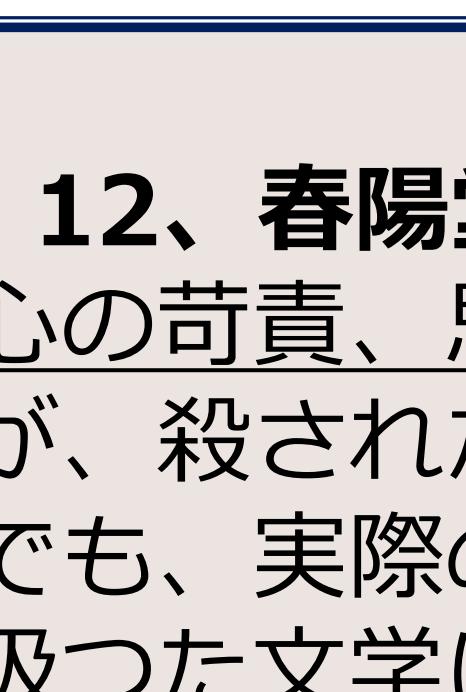
◆文学に描かれた自然科学の意義を問い合わせ直す

戦間期の日本探偵小説とは...

- ▶ 戦間期 = 1918～1939年頃
- ▶ 江戸川乱歩や夢野久作らの活躍。
- ▶ 探偵による謎やトリックの解明を重視した〈本格探偵小説〉と、エロ・グロ・ナンセンスに寄った〈変格探偵小説〉の人気。
- ▶ 雑誌『新青年』を中心に多くの探偵小説作品が掲載・連載。

〈変格探偵小説〉の量産

幽霊（心霊）言説・科学言説の流入
近代国家の成立・発展との影響関係



『新青年』（第1巻第1号、1920・1）江戸川乱歩（1894～1965）

探偵小説と幽霊のつながり...

小酒井不木『犯罪文学研究』（1926・12、春陽堂）

錯覚又は幻覚による幽霊は、通常良心の苛責、思念の迷執の際に見られるものであつて、人を殺した者が、殺された者の亡霊を見て、それに悩まされる例は、文学の上でも、実際の上でも、夥しい数である。従つて、かやうな幽霊を取扱つた文学は犯罪文学として論ずる価値がある。

▶ 同時代の文学作品における幽霊のありようと探偵小説（広く犯罪文学）の結びつきに関する指摘。

→一方で、**錯覚や幻覚によるものと断定できない幽霊的存在**を描いた探偵小説作品も。

江戸川乱歩『幻影城』（1951・5、岩谷書店）

〔前略〕我々が広義の探偵小説と云っているのは実は探偵小説と怪談とを包含する名称なのであって、所謂変格探偵小説の大部分は怪談であると云つても差し支えないことを、今になって私は気づいたのである。

▶ 戦後の評価だが、戦間期の〈変格探偵小説〉が怪談の側面も持つていたとする論説。

幽霊は如何にして描かれた／描かれなかつたか...

江戸川乱歩「幽霊」（『新青年』1925・5）

▶ 探偵・明智小五郎が科学捜査によって幽霊の正体を解明。

→ 1920年代の**近代科学の万能性**と**個人情報管理の実態**を描く。

久生十蘭「湖畔」（『文藝』1937・5）

▶ 幽霊的存在となつた妻とともに暮らすために、主人公が逃避行を計画し、二人は箱根・芦ノ湖から姿を消す。

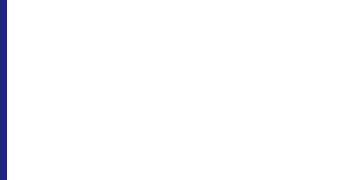
→ 時代設定が明治末期になつていて科学捜査が回避され、幽霊的存在の正体も暴かれない。

→ **曖昧なものをあえて科学で解明しない作劇構造。**

本研究の社会的意義...

◆ 戦争へと向かっていく全体的で強い力に揺さぶられたとき、**大衆文化がオカルティズムをどのように受け止めたのか**を知る手掛かりとなる。

→ **科学／技術（science/technology）**が著しく発展した現代社会で、**危機との向き合い方を再検討する契機。**



発表者情報